



下組

雀

踊は、今から三百余年前、当下組が当時土手組と称して水陸の要衝にあたって殷賑を極めていた頃に、京都より京舞の師匠を招き、盆踊りや祭礼等、諸人の遊樂の際に競って参加し、地方人の無聊を慰め、その後日高地方の各地の祭礼舞踊として採用され、広まったと伝えられています。昭和41年9月下組の中に保存会組織「御坊下組の雀踊保存会」を結成し継承されています。昭和54年5月御坊市無形民俗文化財指定、昭和56年7月和歌山県無形民俗文化財指定をうけ、現在に至っております。

奉

納は、小竹八幡神社の秋季例大祭(放生会)にて行われます(10月5日午後1時過ぎ頃)。雀踊の奉納を行なう踊り連中、謡方、囃子方等の人員は、祭礼に於いて下組の大道具、獅子舞、幟等に加わる若衆を割いた上で人員を募るために、必然的に主として役員以上のメンバーとなりますが、最近では可愛らしい幼稚園、小中学生や女性の参加希望者も増え、年々賑やかな奉納に変わりつつあります。奉納の形は、中央に謡方と囃子方が輪になり配置、その周りを踊り連中の輪で囲み、右回りに進みながら踊ります。当祭礼は、时期的に雨になることも多く、囃子方と謡方の衣装、道具が濡れない様、雨の対策をして踊りの輪の外で演奏し唄って奉納する事が習慣化していました。今後はそれを改め、よほどの雨でない限り本来の形である踊りの輪の中に鳴り物を配置する事としています。

衣

装道具は、踊り方(踊り連中)の先奴は化粧回し、印をつけた奴襦袢、腰巻、紺と白の角帯、豆しぼり、藺笠、足袋に荒縄巻きです。奴は、印をつけた奴襦袢、腰巻、紺と白の角帯、豆しぼり、藺笠、足袋に荒縄巻きです。先奴、奴ともに道具は持ちません。音頭取り(謡方)は、踊り方の奴に同じ、若しくは和装(羽織袴)で、道具は扇子です。三味線方(囃子方)は、踊り方の奴に同じ、成人女性に着物とおけさ笠、道具は大棹三味線(女性は細棹も可)です。

下

組の「祭の美学」。10月5日本宮で9組に割充てられた宮入式の間は各組1時間になっています。与えられた待ち時間60分を超えることなく、また余すことなく式を終了するいわゆる式時間58分を上品(じょうぼん)として奉納し、あるべき姿等を話し合い、目標として常に下組の「祭の美学」を追求しています。

印

は左下向きの「雀」となります。幟の旗印は「三番」です。当該雀踊の他に獅子舞も奉納しています。祭礼参加氏子組9組の中では世帯数や領域が一番少ない氏子組になります。そのため小竹八幡神社直系の氏子の上組、中組、下組の中では余興の大道具四ツ太鼓の参加は歴史が浅く、昭和初期といわれ若衆の不足により大道具を出せない時期もあつたりしました。世帯数や領域が一番少ない半面まとまり良く、昨今では他の氏子組以上の情熱で「祭りの美学」を求めてこれからも伝統を継承しつつ奉納を続けていきたいと考えております。

